

子ども六齋会 の活動



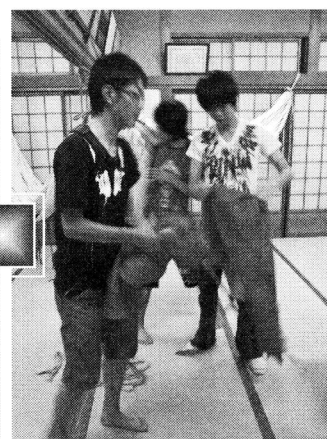
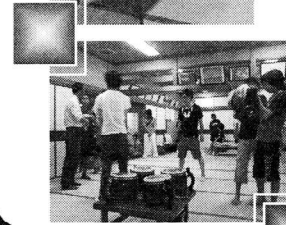
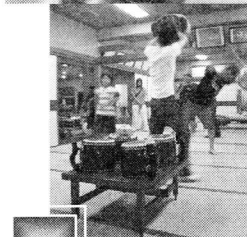
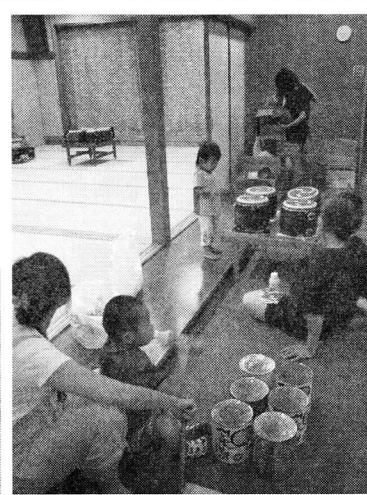
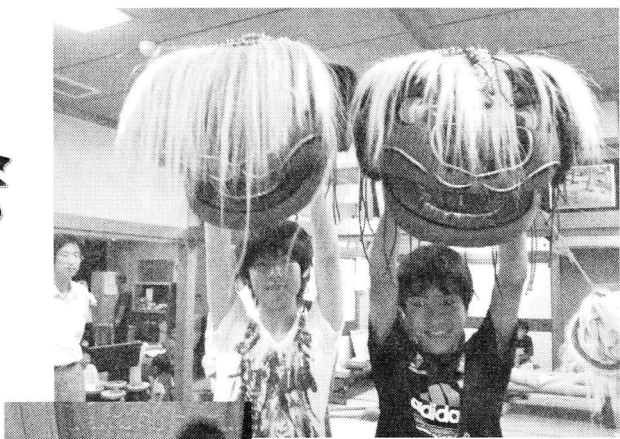
■毎週第2金曜日・第4金曜に吉祥院高齢者ふれあいサロンで練習会が行われています■

現在、「吉祥院子ども六齋会」の活動が活発化し、獅子の如く会員や保護者が会の活動を補助する取り組みが行われています。

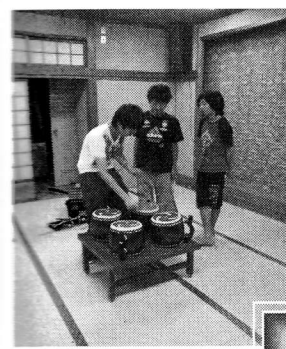
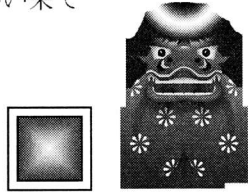
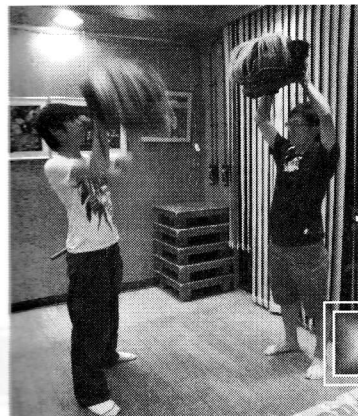
吉祥院六齋保存会の情熱ある指導のもと子どもたちは、めきめきと技術が上達し、低学年の子どもたちは、基本的な指導や習わせ方に関して、難しいところは学校の先生方にサポート役として協力をしていただき、楽しい雰囲気の中で練習会が行われています。

今年度より、六齋の練習の他、宿題や補習、六齋の歴史を学ぶ場、くつろげる所として、「六齋寺子屋」をスタートしました。

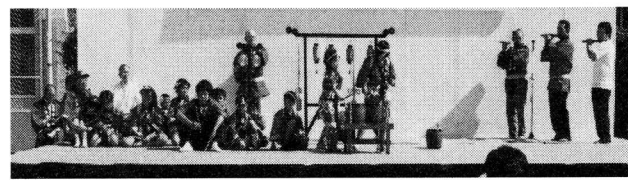
ぜひ、練習会や寺子屋に遊びに来ててください。



☞ 六齋の練習は楽しいよ！
見学に来てね。



●吉祥院子ども六齋練習会及び六齋寺子屋は
住所／京都市南区吉祥院砂ノ町47番地
吉祥院高齢者ふれあいサロン和室
電話／075-691-7561
気軽に見学出来ます。



Happy Summer Thyme in Biwakoin 2004-2006



地域教育として「吉祥院子ども六斎会」の役割

ハッピーサマータイムin琵琶湖（2004-2007）の取り組みは、吉祥院子ども六斎会で活動する子どもたちが共同活動を体験し、仲間意識を高めることなどを目的にプログラムを構成しました。

子どもたちが地域の伝統芸能について話し合う中、高い目標を成し遂げようと切磋琢磨しあう仲間を得て大きく成長してくれました。

主催：吉祥院地域教育懇話会／後援：吉祥院支部／協力：ヤマハマリーナ／モーターボート提供：關正雄（獅子の如く顧問）



第9回

こども六斎教室 成果発表会



京都六斎念仏保存団体連合会会長橋本治夫氏

2012年2月19日（日）午後2時から、京都市立西院小学校体育館において、第9回こども六斎教室成果発表会が行われ、京都市内で活動する「こども六斎」クラブの9組が出演しました。

こども六斎教室は、昨年度まで文化庁が7年間続けてきた「伝統文化こども教室事業」が中止となりましたが、2010年（平成22）7月から、後継者育成や六斎教室を維持存続するため、文化庁が新たに「観光振興・地域活性化事業」を設置し、従来の各地域の六斎クラブが継続参加することが出来るようになりました。

吉祥院子ども六斎会は、第3回以降、「成果発表会」には出演していませんでしたが、新たな事業に変わり、今回久しぶりに参加しました。吉祥院子ども六斎会の子どもたちは、日頃の練習の成果として、元氣いっぱい四つ太鼓を叩いていました。

六斎「成果発表会」に出演

西片里紗

京都芸術大学臨床心理学1回生

（吉祥院六斎歴史研究会獅子の如く編集部）

京都市内で活動する9組の子ども六斎が集いこども六斎成果発表会が開催され、吉祥院子ども六斎会も参加する機会がありました。

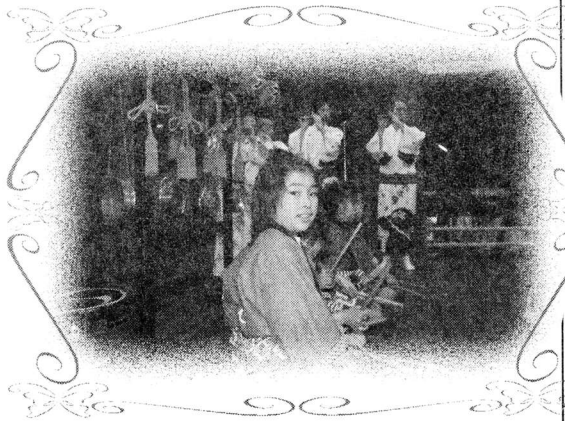


他の子ども六斎（太鼓）の叩き方は、地域によって少しずつ違い、他の六斎を見られる大変貴重な機会でした。

私たちが日頃叩いている吉祥院六斎保存会の太鼓の叩き方とは、違うという少し違和感はありましたが、それを気にさせないぐらい上手で、私よりも若い子どもたちが高い技術で太鼓を叩いていることに、とても刺激を受けました。

吉祥院子ども六斎会の子どもたちからは、もっと六斎保存会の方から高い技術を習得したいという意見があります。

私たち研究会も子ども六斎会の指導者として、子どもたちに良い刺激を与えられるよう、また自分自身の技術の向上ができるように努力していきたいと思います。



*It has been designated
an Important Intangible Folk Cultural Property.
Kissyoin Rokusai Nenbutsu Odori.*

吉祥院天満宮のひのき舞台に立つことは、小さな子どもたちの憧れの存在である。

この目を目指し、日々稽古に励む子どもたち、緊張する姿や真剣な眼差しに取材のたびに心を奪われる。

二〇一三年四月二十五日、初舞台を踏む子がいる。

子ども六齋会に入会して約三年。昨年、八月二十五日の初舞台は、残念ながらその思いは届かなかった。話を聞こうと話しかけると、その子の目には、薄っすらと涙が浮かんでいた。悔しさが混ざった涙は、自信に変わり、積み重ねた瞬間が必ず力となってくれるだろう。

夢に向かって全力を尽くす姿が本当に眩しかった。

ひのき舞台に上がるのは厳しい、当たり前のことでも担い手育成を通して痛感した。何ヶ月、何年も稽古を積み重ねた努力を、数分で出し切らなくてはならない。

限られた時間の中で、子どもたちが太鼓を打つ姿を逃がさないよう、必死にシャッターを切り、子どもたちが打つ太鼓の響きを聞き入った。

頑張っている子どもたちの姿を見て欲しいと強く思い、六齋の発展と担い手育成に取り組んできた。どうしたら地域の皆さんに伝わるのかと頭を抱え、会報「獅子の如く」を何度も書き直した。子どもたちの話に耳を傾け、頑張っている子どもたちを多くの方々に伝えたい。

初舞台に挑む子どもたちの努力する姿から、勇気や元気を分けてもらった。

私を感じた感動を、本紙を通じて、少しでも共有していただけたらと思う。

獅子の如く代表 石田房一